

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520597

研究課題名(和文)日本人英語音声に関するリンガフランカ中心特性の特定

研究課題名(英文) Identification of Lingua Franca Core Features of Japanese Accents of English

研究代表者

都築 雅子 (TSUZUKI, Masako)

中京大学・国際教養学部・教授

研究者番号：00227448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：英語母語話者による聴き取り実験の結果を分析・考察することにより、日本人の話す英語音声特性のうち、(1)流音の誤発音、(2)破裂音・摩擦音の弱さおよび誤発音、(3)母音の長さの変更、(4)強勢アクセントの間違い・非実現、(5)トーン・ユニットにおける区切り方の間違い、の5つの音声特性が、通じなさに関わる中心特性であることがわかった。中でも特に、(a) 氣息を伴わない語頭の破裂音、(b) 複合語アクセントの非実現、は日本人英語にいくら慣れた英語母語話者であっても、インテリジャビリティを著しく損なう特性であり、日本人英語学習者が最初に矯正し、学習すべき特性であると言える。

研究成果の概要(英文)：Through analyses of the transcription of Japanese EFL speakers' speech by English native speakers, we have identified those features that would impede intelligibility: (1) mispronunciation of liquids (2) mispronunciation and/or weakening of plosives, fricatives & affricates; (3) vowel length alternation; (4) misplacement or absence of word and phrase stress; (5) improper segmentation of words, phrases and sentences. It has also been found out that, among those features, (a) unaspirated plosives at the beginning of words, (b) absence of compound stress are the features that would most severely hinder communication with even English native speakers well-exposed to Japanese accents. These findings will contribute effective teaching, especially the prioritization of phonological instructions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：インテリジャビリティ 日本人英語 英語母語話者 リンガフランカ 中心特性 分節音 強勢アクセント 国際英語

1. 研究開始当初の背景

英語は、母語話者・非母語話者に関わらず、世界の人々がコミュニケーションをはかる手段 リンガフランカ(Lingua Franca)となっている。このような状況の下、世界では、シンガポール英語など、それぞれの母語の影響を受けた様々な英語変種が存在するが、それらを変種(World Englishes)として容認する一方で、意思疎通のために最低限必要な英語音声のリンガフランカ中心特性(core features)を確立しようとする試みがなされてきている。中心特性の特定は、英語発音教育・学習において優先的に改善すべき特性とそうでない特性の峻別につながる点で、大きな意義がある。

Jenkins (2000, 2002)は、リンガフランカ中心特性と非中心特性の確立を提唱し、中心特性として、(1)子音の発音、(2)語頭破裂音の氣息音、(3)母音の長さの維持など、いくつかの項目を挙げている。しかしながら、日本人音声に特化した中心特性の研究は、Tsuzuki & Nakamura(2009)により始まったばかりである。

2. 研究の目的

本研究は「アジアのリンガフランカとして、日本語母語話者の話す英語の音声面における中心特性(コミュニケーションの阻害要因に関わる音声特性)の確立」を目的としている。日本語母語話者の話す英語に関する中心特性の研究については、Tsuzuki & Nakamura(2009)により、日本人英語に慣れた英語母語話者を対象とした日本人理系院生の英語音声の聴き取り実験を通じて、始まったばかりである。しかも、日本人が英語でコミュニケーションをはかる相手は、日本人英語に慣れた英語母語話者だけに限られるわけではない。

本研究では、聴き取り実験の対象を日本人英語に慣れていない英語母語話者、さらには韓国語母語話者、中国語母語話者などの非英語母語話者に広げ、英語母語話者、非英語母語話者に関わらず、日本語母語話者が英語でコミュニケーションをする際の、コミュニケーションの阻害要因となる英語音声特性、すなわち中心特性を特定することを目標とする。以上の研究により得られた知見をもとに、より効率的な英語発音矯正(学習)方法を探る。中心特性と非中心特性の区別は、英語学習における優先課題の指針となるため、英語教育という観点からも有効だからである。

3. 研究の方法

Tsuzuki & Nakamura(2009)の研究を出発点として、実験方法を精査した上で、聴き取り実験の対象者を日本人英語に慣れていない英語母語話者、さらには韓国語母語話者、中国語母語話者など非英語母語話者に広げるこ

とにより、母語話者・非母語話者間および非母語話者間コミュニケーションの阻害要因となる日本人英語音声特性の解明を試みる。そのため、次の方法で行なった。

(1)日本人英語に慣れている英語母語話者と対象とした日本人英語音声の聴き取り実験の結果を、英語音声の音声解析ソフトによる分析を含め、詳細に分析・考察を行った。

(2)日本人英語に慣れていない英語母語話者(ミシガン大学大学生・院生 23名)による聴き取り実験を行った。日本滞在歴・日本語学習歴を含めたアンケート、聴き取りによる転記、理解度評定の順に行った。結果を分析・考察し、日本語母語話者の英語音声特徴の中で、コミュニケーションの阻害要因となる重要な特性(中心特性)と阻害要因とならない特性を峻別した。具体的には転記されたものから、聞き取れなかった語句および聞き誤った語句を抽出し、その要因を探り、中心特性を特定した。

(3)日本にいる韓国語母語話者を対象に、同様の聴き取り実験を行った。日本語学習歴を含めたアンケート、聴き取りによる転記、理解度評定の順に行った。現在、分析中であり、その結果を第六回 English as Lingua Franca (アテネにて 2014年9月)で発表する予定である。実験遂行・分析に手間取り、当初の予定より遅れているが、今後、韓国および中国で韓国語母語話者および中国語母語話者を対象に実験を行い、その結果を分析考察し、最終的に非英語母語話者とのコミュニケーションにおける中心特性の抽出を行う予定である。

4. 研究成果

(1)日本人英語に慣れている英語母語話者を対象とした日本人英語音声の聴き取り実験の結果を、英語音声の音声解析ソフトによる分析を含め、詳細に分析・考察を行った。その結果、日本人理系院生の英語音声特性のうち、流音の誤発音、破裂音・摩擦音の誤発音および発音の弱さ、母音の長さの変更、強勢アクセントの間違いおよび非実現、トーン・ユニット関わる間違いと中核強勢の間違い・非実現、の5つの特性が通じなさに関わる重要な中心特性であることがわかった。については、日本語では2種類の流音の区別がないことが誤発音になる要因であり、についても、氣息を伴わず、短く、かつ弱く発音する日本語の破裂音の転移が英語破裂音の弱さの原因と考えられる。についても、日本語は強勢アクセント言語ではないため、日本語母語話者にとって英語を発する場合も、強勢のアクセントが実現はむずかしくなるのである。さらに、英語は強勢によりリズムをとる言語であるが、日本語のモ

ーラ(拍)によるリズムの影響を受け、二拍ごとに弱い強勢がつく変なリズムになってしまう傾向もあることがわかった。その上、複合語の場合、第一要素に強勢が置かれなければならないが、実現されない場合がほとんどであることもわかった。これら強勢に関わる誤発音がミスコミュニケーションを引き起こす大きな要因となるのである。Jenkinsでは、強勢ストレスは英語圏内の方言差もあり、非中心的特性であるとされているが、日本人の英語音声特性においては中心特性であると考えべきである。以上の研究成果は、Nishio & Tsuzuki (2008)で発表された。さらに論文にまとめたものは、大学英語教育学会紀要(JACET JOURNAL)no.58 に掲載された(Nishio & Tsuzuki 2014)。

(2)日本人英語に慣れていない英語母語話者を対象とした日本人英語音声の聴き取り実験の結果を、分析・考察を行い、コミュニケーションの阻害要因に関わる中心特性を抽出した。その結果を、日本人英語に慣れている英語母語話者を対象として実験結果と比較した。その結果、以下のことがわかった。5つの中心特性(流音の誤発音、破裂音・摩擦音の誤発音および発音の弱さ、母音の長さの変更、強勢アクセントの間違いおよび非実現、トーン・ユニット関わる間違いと中核強勢の間違い・非実現)の中で、氣息に欠ける語頭の破裂音の弱さ、複合語アクセントの非実現が、インテリジャビリティを特に著しく低下させることがわかった。これらの特性は、英語母語話者が日本人の話す英語にいくら慣れたとしても、ミスコミュニケーションの要因となる重大な特性である。すなわち、これらの音声特性は、日本人英語学習者が、まず第一に矯正する必要のある誤発音だと言える。

一方、日本人英語に慣れていない英語母語話者にとっては、流音の誤発音 破裂音・摩擦音の弱さ 強勢アクセントの間違い・非実現などに加え、/ɹ:/の誤発音が、コミュニケーションの阻害要因になることがわかった。これらの音声特性は、日本人英語に慣れた日本で教えている英語母語話者教員にとっては、たとえ日本人英語学習者が間違っ

て発音しても、理解できてしまうので、無自覚に受け入れてしまうということになりやすい誤発音と言えよう。英語母語話者教員はその点を自覚し、気をつける必要があるということになる。

以上の研究成果は、Tsuzuki & Nishio (2011), Tsuzuki, Nishio & Bong (2013)で発表された。現在、論文にまとめている。

(3)韓国語母語話者を対象とし、同様の聴き取り実験を行った。日本滞在歴・日本語学習歴を含めたアンケート、聴き取りによる転記、理解度評定の順に行った。現在、分析中であ

るが、英語母語話者を対象とした実験結果と同様、子音の誤発音・弱さなどが、コミュニケーションの阻害要因に関わる特性と考えられる一方、韓国語母語話者の場合は、強勢アクセントの間違い・非実現は、コミュニケーションの阻害要因には関わらない可能性があるなど、異なる結果も出てきている。母語である韓国語が日本語と同じく、強勢アクセントを有さない言語であることが原因であるかもしれない。今後、実験結果を精査・分析し、その結果を第六回 English as Lingua Franca (アテネにて 2014 年 9 月)で発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

Nishio, Yuri & Masako Tsuzuki (2014) Phonological Features of Japanese EFL Speakers from the Perspective of Intelligibility. *JACET JOURNAL* No.58, 57-78. 査読有

Tsuzuki, Masako, Yuri Nishio & Hyun Kyung Bong (2013) Intelligibility assessment of Japanese accents by native speakers of English, *ELF The Sixth International Conference of English as a Lingua Franca, Programme and Abstracts*, 80. 査読有

都築雅子(2013)「特集/授業に活かす言語研究: 語彙意味論 正しい英文を組み立てるために大切なこと」『英語教育』12月号,大修館,18-19. 査読無

Nishio, Yuri & Masako Tsuzuki (2013) Realization of English intonation by Japanese future teachers affecting intelligibility, *ELF The Sixth International Conference of English as a Lingua Franca, Programme and Abstracts*,68. 査読有

Nishio, Yuri (2013)The crucial factors affecting perceptual units of English for Japanese children: syllables or moras? *The JACET 52nd International Covention Book*, 59. 査読有

Nishio, Yuri (2013)What is the goal of English pronunciation for Japanese futer elementary school teachers: accuracy or intelligibility? 『全国英語教育学会北海道研究大会発表予稿集』36-37. 査読有

奉鉉京 (2013) Acquisition of the English Preposition 'on': Assessing the Prototypicality Hypothesis, *Journal of Humanities and Social Sciences Shinshu University* 7, 142 - 158. 査読有

西尾由里 (2012) 「小学校外国語教育における目標に関する問題点：コミュニケーション・開始年齢・文字学習の視点から」『教育学・教育実践論叢 2012』学習院大学文学部, 117-132. 査読無

Nishio, Yuri (2012) "Age of Onset of Perceptual English Syllabic Units for Japanese Children." *The 10th Asia TEFL International Conference Proceedings*, 248. 査読有

西尾由里 (2012) 「総合英語プログラム変化ともなう熟達度テストの影響」『茨城大学大学教育センター紀要』第 1 号, 27-40. 査読無

Tsuzuki, Masako & Nishio, Yuri (2011). Perceptive and acoustic analyses of Japanese accents from the perspective of intelligibility, *The 17th Conference of the International Association for World Englishes*, (IAWE), 25. 査読有

奉鉉京 (2011) "How is Our Curriculum Doing? : The Curriculum of English Language Education Developed and Implemented at Shinshu University." *The Korea English Education Society 国際大会論文集* 29-41. (招待講演論文) 査読無

奉鉉京 (2011) "Lematic Transfer in Second Language Acquisition of English Prepositions." 『環太平洋応用言語学会国際大会論文集』第 16 号. 109-116. 査読有

〔学会発表〕(計 6 件)

Tsuzuki, Masako, Yuri Nishio, & Hyun Kyung Bong. Intelligibility assessment of Japanese accents by native speakers of English, *ELF The Sixth International Conference of English as a Lingua Franca*, Rome (Tre University), September 4-7, 2013.

Nishio, Yuri & M. Tsuzuki. Realization of English intonation by Japanese future teachers affecting intelligibility, *ELF The Sixth International Conference of English as a Lingua Franca*, Rome (Tre University), September 4-7, 2013.

Nishio, Yuri. The crucial factors affecting perceptual units of English for Japanese children: syllables or moras? *The JACET 52nd International Convention*, Sapporo, August 31-September 2, 2013.

Nishio, Yuri. Age of Onset of Perceptual English Syllabic Units for Japanese Children. *The 10th Asia TEFL International Conference*, Delhi (Hotel Leela Kempinski) October 4-6, 2012.

Tsuzuki, Masako & Yuri Nishio. Perceptive and acoustic analyses of Japanese accents from the perspective of intelligibility, *The 17th Conference of the International Association for World Englishes*, (IAWE), Melbourne (Monash University), November 23-25, 2011.

大森裕貴, 今井孝夫, 都築雅子, 奉鉉京他. Applied English Grammar Based on the Latest Linguistic Theories. 第 50 回日本大学英語教育学会 (JACET) 国際大会. 福岡(西南大学) 8月30日-9月2日, 2011.

〔図書〕(計 6 件)

高等学校検定教科書『英語表現』(2015 発行予定) 鈴木達也, 都築雅子, 山添直樹他 4 名 (株)フォーイン スクリーンプレイ事業部 144 ページ

西尾由里 (2014). 「小学生の音声指導の理論と実践」, 愛知教育大学外国語教育講座著, 『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』名古屋: 鳴海出版. 25-32.

綾部洋平, 山添直樹, 十柚木なつ (2013) 『PowerPoint2013 パーフェクトマスター』秀和システム. 1015 ページ

都築雅子 (監修) 都築雅子, 奉鉉京, 山添直樹, 鎌倉義士 (翻訳) (2012) 『英国王のスピーチ』名作映画完全セリフ音声集スクリーンプレイシリーズ 162. フォーインスクリーンプレイ事業部. 159 ページ

都築雅子(2012)「描写述語構文」『最新言語理論を英語教育に活用する』藤田耕司他編,開拓社. 277-289.

西尾由里 (2011)『児童の英語音声知覚メカニズム L2 学習過程において』東京:ひつじ書房. 287 ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

都築 雅子 (TSUZUKI, Masako)
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号: 00227448

(2)研究分担者

西尾 由里 (NISHIO, Yuri)
岐阜薬科大学・薬学部・教授
研究者番号: 20455059

(3)研究分担者

奉 鉉京 (BONG, Hyun Kyung)
信州大学・全学教育機構・准教授
研究者番号: 50434593

(4)研究分担者

山添 直樹 (YAMAZOE, Naoki)
名城大学・大学教育開発センター・講師
研究者番号: 00555641